

小島一也先生の遺徳に懐う

板倉 敏郎

平成 26 年 12 月 5 日、小島一也先生がご逝去されて、早 3 年の歳月が経とうとしております。

私が初めて先生にお会いしたのが平成 17 年 4 月ですから約 10 年近いおつきあいでした。当時、柿生中学校の校舎改築が具体的な動きとなり、地域の方々を交えた、新校舎の施設・設備などの検討をご一緒にさせて頂きました。その中で、郷土柿生に博物館施設を是非建設しようではないかという話が持ち上がりました。やがて地元住民の方々の輪も広がり、川崎市教育委員会にも何回も足を運び、説得、陳情し、新校舎の中に博物館施設を造ることが実現する運びとなりました。

このような動きの原動力となったのが先生の郷土に対する思いと情熱でした。初代の郷土史料館支援委員長を受けて頂き、カルチャーセミナーでも何回も講師として登場して頂きました。講演をして頂いている時の先生の少年のような目の輝きや溢れんばかりの郷土に対する好奇心は、聴講者の心を釘づけにしておりました。

生前、平成 21 年に発行された『麻生郷土歴史年表』は編年体のスタイルで郷土の歩みを克明に記し、当時の郷土の出来事を各ページごとにコラムで綴ったものでした。実に興味深く読ませて頂きました。祖先の歩みの重みがずっしりと伝わってくる圧巻でもありました。

また、先生がお亡くなりになる直前まで、郷土史各時代の重要事項を詳細に研究され、その成果を書きためられておられ、「柿生文化」にも投稿して下さいました。この原稿は先生がご逝去されたのち平成 28 年、小島澄人氏のご尽力で重厚な冊子『麻生の歴史を探る』として刊行されました。この二つの冊子は郷土の歩みを知るうえで大変貴重な研究冊子であり、後世に必ずや伝えられていくものと確信しております。

近年、「地方消滅」という著書が全国的に評判となり多くの人に読まれました。この本は日本全国の地方都市の多くが人口減少、住民の老齢化、少子化などの問題を抱え、これらの地域が消滅する可能性があるという深刻な課題を提示したものです。これらの課題を抱えた諸都市、地域では地域活性化を目指して手を替え、品を替え努力をしていますが、なかなか良い結果を見出すことができないのが現状です。地域創生という立派なスローガンは提示されますが、なぜうまく行かないのでしょうか。

それは、地域住民の思いを繋げる「核」となるものが明確になっていないことによるものと考えられます。住民のだれもがもてる共通の「思い」すなわち「核」とは、郷土の歩み、言い換えれば祖先の思いを知ることです。先生の残されたこの 2 冊の著作は、現代人に対して、曾てその土地に生きてきた人々の思いを伝えることのできる大切なメッセージとなるものと思います。祖先の「思い」を知るといことは、祭りや伝承、生活習慣、文化遺産等をしっかりと受けとめ、知ることです。そして、知ることのできる場を提供するのが博物館や郷土史料館です。

現在、文化庁が中心となって地域創生を目指して「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」を推進しはじめました。平成 29 年度には全国 98 力所の地方公共団体が、例えば「地域創生の核となる博物館実行委員会」や「博物館人材育成事業実行委員会」などを組織して、地域の活性化のため立ち上がりました。まさに、博物館・郷土史料館が地域活性化の「核」となりうることが実証され始めました。

小島一也先生の思いも、郷土の活性化を目指した柿生郷土史料館の設立にあったものと思っています。住民が心をつなげて郷土史料館をもとに郷土を活性化させることは実現可能なことであると確信しています。柿生郷土史料館は未来の郷土に架ける橋です。郷土の歩みや文化を知らずして未来を創造することはできません。

貴重な宝を残してくださった小島一也先生に感謝すると共に、郷土の未来を背負う子供たちや、今日の郷土の文化を支えて下さっている現役世代の皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げ、私の思いとさせていただきます。